

意識が浮上する。最初に知覚したのは全身の鈍い痛みと、寒さだ。照明はついていない。窓はない。

身じろぎすると、立ったまま拘束されていることがわかった。ガチガチに固まった筋肉をゆっくり動かし、首を上げる。両手足を四方に広げるように固定されている。拘束具は金属製らしく、びくともしない。

静かに呼吸し、自分の肩書を確認する。

対魔特務機関「天照」特殊部隊「晶」戦闘員、コードネームは「玻璃」。魔性が活発化している歓楽街で調査及び討伐任務に当たっていた。

特別な任務ではない。大規模な作戦の合間に回しているルーティン、いわばパトロールだ。担当地区を監視し、通報があれば駆けつけ、魔性を討伐する。人目につく場所に現れる魔性は末端の雑魚が大半で、単独で倒せないほど強い個体はまず現れない。

現に、玻璃は今の地区の担当になってから軽い負傷すらしたことがない。にも関わらず、不意打ちに気づくことすらできなかった。玻

璃は無音の雷が落ちたような攻撃を食らい、地面に倒れ伏して意識を失うまで、襲撃者の影すら見なかった。

暗闇に目が慣れてきて、周囲の様子が見えてくる。殺風景という言葉を絵に描いたような、四方をコンクリートで固めただけの飾り気のない部屋だ。天井の四隅に一台ずつ配置された監視カメラがこの部屋の用途を伝えてくる。人が出入りできるのは、玻璃の正面にある扉だけだ。

自身の身体を見下ろすと、穴の開いたボロボロの戦闘スーツを着たままだった。気を失ってからそのまま連れてこられたらしい。当然、通信機をはじめとした装備は奪われている。

戦闘員が魔性に攫われるというケースは聞いたことがなかった。末端の戦闘員が持っている情報など、たかが知れている。誘拐犯の目的がわからない。首筋に嫌な汗がにじんだ。

ゆっくりと深呼吸を繰り返して、焦ることはない、と自分に言い聞かせる。定時連絡が途絶えたとわかれれば本部が動く。身体のコンディションから考えると、あの歓楽街からそう遠く離れてはいないはず

だ。望みはある。

ほんの少しでも休もうと目を閉じた瞬間、真っ白な光が瞼を焦がした。

目が慣れる間もなく、がこん、と音をたてて正面の扉が開いた。そして折りたたみ椅子を抱えた男がひとり、窮屈そうに扉をくぐって入ってくる。

服装だけなら学生か、休日の勤め人に見えるほどラフな出で立ちだった。しかし上背は玻璃を二十センチは超えており、腰回りの頑強さはただのスポーツマンには到底見えない。気配からして、おそらく魔性の中でも上位の個体――

「俺はビジネスマンでも学生でもない。君たちが上位個体と呼ぶ生き物ではないし、そもそも魔性とやらでもない。ガタイがいいのに深い意図はないが……アジアでは少し目立つ体格だったな」

返事をされた。そう思ったのは、男が玻璃の考えていることにひとつひとつ回答し始めたからだ。

男は眉ひとつ動かさないまま続ける。

「俺は『母』に仕え、この星の命の勢力図を書き換え、その最上位に収まるべく働く者だ。君たちが魔性と呼んでいるものは、君たちの感覚で言うなら獵犬とか、働きアリとか、量産ロボットとか、そういう位置づけになる」

「……」

玻璃が絶句していると、男は分厚い手を玻璃の目の前で振りながら怪訝そうに言った。

「言葉は通じているか？君の母語は日本語で合っているよな？それとも、挨拶がないと会話を始められないシステムなのか？こんにちは？」

「貴様は」

玻璃がショートしそうな頭で捻り出した第一声は、実に陳腐でありきたりだった。

「何者だ」

男はたれ気味の臉をゆっくりと瞬かせる。

「俺の身分は教えた。個体名を聞いているのか？恐らく君には聞

き取れないぞ。縋弱<sup>○</sup>縋<sup>○</sup>「莠<sup>○</sup>螟也塙だ」

「ふざけているのか？」

「悪いな。君が理解できそうな名前を考えておくよ」

男が語った内容は、特殊構成員の玻璃ですら知らない情報ばかりだった。上位個体を含めたすべての魔性に指図する者、『母』と呼ばれる首魁の存在。そして最終目的。

この情報はなんとしても持ち帰らなければならない。幸い、こうして拉致されたということは、少なくとも玻璃の始末が目的ではない。

玻璃が今すべきことは、男の目的を探りつつ、拘束を抜け出す機会を伺うことだ。

「平静を取り戻すのが早いな。さすがは特殊部隊員」

男は椅子を広げて腰かけ、上着のポケットから取り出したタブレットを弄っている。

「水を差すようで悪いが、君は仲間の元へ帰ることはない。その拘

束を外したければ、俺の提案に『はい』と言うことだ」  
まただ。また考えを読まれた。

「提案？」

「大した話じゃない。仕事、辞めないか？」

「断る」

「だろうな」

男はタブレットから顔をあげず、玻璃の方を見もしない。本気な  
のかふざけているのか、男の真意はちつとも読めなかった。

「君にその拘束を破壊する手段はないだろう。退屈ついでに俺の  
話を聞くといい」

「私に拷問は通用しないぞ。苦痛に耐える訓練を受けている」

「知っているし、そんな心配はしなくていい。俺は平和主義者だ」  
それより、と男は続ける。短く整えられた黒髪が白けた照明を反  
射している。

「退職を勧められる理由を知りたくはないか？」

「貴様らの理屈が、我々人類に理解可能なものとは思えない」

「まあそう言わずに聞け。君個人にとって、とても重要な話だ」  
「私は任務中の戦闘員だ。私個人など存在しない」  
玻璃がそう言うのと、男が顔を上げた。眠たそうだった瞼が見開かれて、墨のような色の瞳が玻璃の顔をじっと見つめている。  
「そんなはずはない。それは魂の否定だ。心のある生き物がそんなことを言うものではないぞ」

（中略）

「君は自分が何者か知っているのに、その自認を保証する具体的な情報を持っていない。そういうことだ」

「私が組織の人間ではないとでも言いたいのか？」

「いいや、それはない。君は正式な戦闘員として、データベースに登録されている」

男は座ったままタブレットから片手を離し、玻璃へと伸ばした。へそのあたりで指先を迷わせ、下腹部に指先を押し当てて。薄い戦闘

スーツごしに、節の目立つ指が体温を伝えてくる。

玻璃は男の指の意図を汲み、鼻で笑った。

「ふん、化物が人間の男のようなことを考えるのだな」

「『ような』ではない。この肉体は成人男性のものだ」

玻璃は黙って眉をしかめた。男はまじめくさった顔つきで玻璃を見つめ返している。

男のふざけきった態度に、玻璃はとうとう痺れを切らして声を荒げた。

「貴様はさつきから何が言いたい？何がしたい？たとえ私の頭がイカれていたとして、貴様に何の関係がある？くだらない探偵ごっこはお仲間とやれ！」

男は緩慢に首をもたげ、玻璃を見上げた。鋭い眼光が玻璃の瞳にぶつかる。

「いいや、君だ。君でなくてはならない」

「なぜ」

「君たちは魔性を『精神体』と呼ぶそうだな。定型の肉体を持たな

い、魂だけの存在と捉えている。その認識は概ね正しい。我々は魂だけの生物だ。個体の同一性を保証するのは記憶や人格のみ。だから心を何より重視する。自分が何者か、決めるのは心だ」

男は立ち上がり、玻璃を見下ろした。大柄な体躯が照明を遮る。真っ黒な影の中、光のない瞳が玻璃を釘付けにする。

「本名がわからない、子どもの頃のことか思い出せない、今の同僚のこともわからない。けれど組織への忠誠心があり、恩義があり、使命感がある。君の人格を構成している要素は噛み合わないのに、君はそのことに無自覚でいる」

「屁理屈だ」

「これを見ても？」

男はずっといじっていたタブレットをひっくり返し、玻璃の眼前に突きつけた。

そこには見たこともない動画サイトが表示されていた。黒一色の背景に、安っぽいピンク色の文字が躍っている。一次停止された動画の中で、一糸まとわぬ姿の女がカメラに向かって秘部を晒してい

た。

ほとんど日に当たらない白い肌。鍛え抜かれた肉体。

——見覚えがある。

「……は？」

それはどう見ても玻璃自身だった。

『たい、たいま、とくむ……きかん、あま、あまてらす……と、とくしゅ、ぶたい、しょ……し、しえん、とー……いん……はり……です』

『へーすご。そんなエリートハリちゃんがあ、なんでこんなところでおまんこおっぴろげてるんですか？』

『……め、めいいい、』

『は？なんて？』

『つ……お、おまんこ、じゅぽじゅぽされるとこ、みみ、み、みなしやんに、みて、ほしいから……です……』

『そうなんだあ！エリートなのにすっごい変態なんだねえ』

『……』

『人が汗水たらして納めた税金でメシ食ってるハリちゃんはある、エロいこと好きすぎてお仕事サボりまくってるそうです』

『そんな、あんっ』

『この雑魚まんこでエリート戦闘員は無理でしょ』

『や、あ、あっあっあっ、』

『動画見てくれる皆さんにごめんなさいは？』

『ああっ、あっ、なん、んあっ、なん、』

『国民を守るべきナンチャラの戦闘員があ、働きもしないで男漁りしまくってえ、△△出演までしちゃうバカ女でごめんなさ〜いって』

『いやっ、やあっ、』

『いまなんつった？』

『んむっ！』

『撮ってくださいいっつったのお前だよな？こっちはわざわざ時間作ってお前みたいな便所まんこの相手してんだよ？』

『んんんん……』

『今からマジの公衆便所コースに切り替えてもいいけど。吐かないで全部消化できるようにするまで特訓な』

『んん……んええ……』

『うえ……んじやねえよブス。泣き顔キショいんだよ。ホラ、誠意が伝わるまで土下座！』

『げほっ……ひっ……う……』

『誰が黙れつつつたよバカ謝罪しなきゃ土下座になんねえだろクソまんこ！』

『ひっ、ごえ、なさい、ごめんなさい！』

長い指が動画をタップした。水っぽい悲鳴が止む。シークバーはほとんど動いていない。

玻璃は無意識に呼吸を止めていたことに気が付いた。恥ずかしいという感情すら沸かず、ただ息をする。目の前の小さ

な板の中、床に頭を擦り付けている裸の自分。

（中略）

「飼い主の名前は古茂田和弘（こもだ かずひろ）。覚えてるか？」  
「……」

視界がくらくらと揺れ、極彩色の蜃気楼がちらつく。現実が遠ざかる。

記憶にある古茂田教官は、日に焼けた肌と、鋭い目つきが印象的な壮年の男性だ。何の力もない、訓練生だった少女を激励し、鍛え、今の「玻璃」へと導いてくれた。玻璃が卒業すると同時に長官になり、それから話したことはないが、間違いなく玻璃の恩人だ。

玻璃はなんとか息を整えようと深呼吸を繰り返し、鉛のように重たい舌を動かした。

「そんな、わけあるか……私は、長官と私的な会話をしたことはない……末端の戦闘員が、組織の長と……懇意……になるわけがな

い……」

玻璃は力なく首を振った。全身が奇妙に弛緩して、呼吸ばかりが荒い。

ありえない。ありえない。ありえない。

「ハア、ハア……き、貴様の言っていることはすべて無根拠だ。その動画がフェイクでない証拠も、私が長官と、個人的な関係にある証拠も、」

「いいや、あるぞ。たぶんな」

「ふざけるのも、大概に……」

「この動画、三時間近くあるんだ。君と鑑賞会をするのも悪くないが、俺の本題とは関係ないからな。飛ばすぞ」

男がタブレットに指を載せ、スッと横へ引いていく。シークバーが左端から右端へ移動する。

右の終端につく少し前で止めると、停止された動画をちらりと確認し、再生アイコンをタップした。止める間もなかった。

なま白い肌をじっとりと湿らせた女が映る。カメラに向かってぐ

ちやぐちやになった陰部を晒し、たつぷりとした乳房を震わせながら、力なく横たわっている。

『ひゅー……ひゅー……けほ、』

『ド淫乱マゾ女のハリちゃん、たくさんちんぽ啜えられて幸せそうですねー。ホラ、皆さんに言うことあんだろ』

『お……おまんこ……いっぱい……ちゅ、かつて、いただいてえ……あ……あい……あいがとお、ご、じゃまいた……』

『そんだけえ？』

『はー……はー……かめらの、むこー、の……み、みなしやんにもお……じゅぽじゅぽして、ほしい……れす』

『とゆうわけでえ、ザーメン中毒のハリちゃんに突っ込んでやってもいいよーって人は、コメント残してくれると嬉しいでーす。じゃ最後に、ちんぽ恵んでくれる皆さんに失礼のないように、コレ挿れまーす』

『んいっ!？あっあっんぐっんんんっ!』

『特注品の膣トレデイルド、ハリちゃん気に入ってくれましたねえ。次のお仕事まで、寝るときもクソするときも任務中も、ずーっとこれ挿れっぱなしにしててね。勝手に抜いたり、緩くなったりしたらマジで公衆便所だからな』

『やあつ、あつ、もつ、い、いつちやぐぐぐッ!』

『任務中もこれでオナニーしてるそうなので、見かけたらちんぽ突っ込んでやると喜びます』

『もうや、もおいきたくなっあっあっあっ』

(中略)

「これだな」

小さく呟いた男が、粘液でぬめる「それ」を指先で掴むまでにしばらく時間を要した。

指先でひっかいたり、穴を押し広げようとしたりと、男は熱心に

取り組んだ。玻璃は目を閉じて待つしかない。

ようやく掴んだ何かを、男は躊躇いなく玻璃の脛から引き抜いた。「んひっ!？」

硬い何かが粘膜を擦る感覚に、小さな悲鳴があがる。

予想もしていなかった衝撃に目を開けてしまった玻璃の顔に向かつて、男は無情に「それ」を突きつけた。

「見覚えがあるはずだ。さっき見たばかりだからな」

ビビッドな色合いの、奇妙にうねった棒状の何か。男の指より一回り以上太く、玻璃の手のひらほどの長さがある。グロテスクな突起がいくつもついた、照明の反射でてらてらと光るそれは。

「動画の終わり際、君が入れられていたものだ」

玻璃は生まれて初めて、気絶したいと心から願った。

「控えめに言って、世間は君に関心を持っている。組織には公金も使われているからな。その構成員がなんのマスクもなくポルノ映像に出演したとあれば」

男がぐっと顔を近づける。眼球どうしが触れ合いそうな距離で、玻

璃はなすすべもなく男の瞳を見つめ返した。

「わかっただろう。君は組織には帰れない。帰る場所など始めからなかった、とも言えるが」

「俺の目的を教えよう」

男の鈍く光るまなざしで、視界がいつぱいになる。男がゆっくりと瞬きをするたび、硬さのあるまつ毛が玻璃の下まぶたをくすぐった。

「君の心を作ることだ」

男の呼気が唇に触れる。

普段の玻璃ならば、唯一自由になる頭で男の額を割っていただろう。しかし今は、思いつきもしない。

「古茂田に飼われていた君と、戦うために生きる君。ふたつの君を統合して、完全な君を作る」

大きな手のひらが、やわい肉ののった下腹部を撫でている。そこに何か大切なものでも仕舞われているかのように。

「どんな君になるかは……『母』のみぞ知る、かな」  
いまや、玻璃にできることは涙を流さないことくらいだった。  
力なく、唇を震わせる。

「どう、やって」

男の薄い唇がゆっくりと弧を描いていく。その声には抑えきれない悦びの色が滲んでいた。

「こうやって」

「ひいッ！」